別冊 1

平成２６年度
広島市専門家評価
評価報告
（高陽中学校）

平成２７年３月

広島市学校評価システム専門家評価
評価委員会

評価報告について

このたび、広島市学校評価システム専門家評価「評価委員会」（以下「本委員会」という。）では、専門家評価（専門家による第三者評価）を実施し、ここに評価報告を取りまとめました。

この専門家評価は、「広島市学校評価システム第三者評価検討会議」の最終報告書で提言された実施方法等に基づいて実施しています。

専門家評価は、各学校の学校経営や教育活動の改善に向けた取組とそれに対する教育委員会の支援について評価し、学校及び教育委員会に対して意見・提言を行うことによって、学校評価の目的を果たす役割を担うものです。そのため、本委員会は、学校における自己評価活動（計画・実践・評価・改善）について専門的見地からより客観的に評価することと、学校に対しては学校経営や教育活動の改善について、また教育委員会に対しては学校への支援について、意見・提言を行うことを役割としています。

本委員会では、今年度、専門家評価を希望した広島市立小学校２校と広島市立中学校１校を評価対象校に決定し、実施しました。本委員会において、学校の状況に応じて評価の目的や評価する項目を定め、学校経営や学習指導等に専門性を有する学識経験者及び退職校長を含む評価チームを編成して、昨年１０月から学校への訪問調査等を行い、その後、学校と報告案に基づく協議を行い、この評価報告を作成しました。

この評価報告にある意見・提言を踏まえ、学校での主体的な学校経営や教育活動の充実・改善に向けた取組が進むとともに、学校の取組が促進されるよう、教育委員会の適切な支援が行われることを期待します。

平成２７年３月

広島市学校評価システム専門家評価
評価委員会　委員長　林　　孝
副委員長　曽余田 浩史
副委員長　髙妻 紳二郎

Ⅰ　評価目的

高陽中学校が、生徒との信頼関係の再構築のために取り組んでいる、生徒指導の三機能を生かした授業づくり、特別支援教育の視点から授業改善及び、中学校区で自主的に取り組んできた小中連携を含めた学校運営の状況を評価し、その充実・改善に向けた意見・提言を行う。

Ⅱ　評価項目

(1)　総合的な状況
(2)　生徒の状況
(3)　学校運営の状況
(4)　授業（改善）の状況
(5)　生徒指導の状況
(6)　その他の教育活動の状況
(7)　小中連携の取組の状況
(8)　環境・施設の状況
(9)　家庭・地域と学校の関係

Ⅲ　評価方法・作業

1　評価手法

今回の評価方法としては、「Ⅱ　評価項目」に関する情報を、学校及び教育委員会から提供を受けた資料、管理職員及び教職員からの聞き取り、授業等の観察によって収集し、それらを総合的に分析した。

2　データ収集方法

データ収集対象	方　　法
学校管理職員	聞き取り、資料提供（学校評価に関するもの、生徒の現状を把握するもの等）
教職員	聞き取り、授業等の観察
生徒	授業等の観察、グループインタビュー
地域の方	聞き取り
その他（教育委員会）	資料提供（学校評価に関するもの、生徒の現状を把握するもの等）

3　作業の経過

時期	内　　容	実施主体
4月	・　専門家評価実施の通知、希望の受付	教育委員会
5月	・　参考資料の収集・分析、対象候補校の選定	教育委員会
6月	・　参考資料の収集・分析、対象候補校からの聞き取り（6/10） ・　対象候補校の選定 ・　評価委員会（評価対象校の決定） ※　電子メールによる会議	教育委員会 評価委員会
9月	・　評価対象校、校長からの聞き取り調査（9/2） ・　評価委員会（評価目的、評価項目の決定、評価チームの編成） ※　電子メールによる協議	評価委員会
10月	・　評価チーム会議（評価計画、今後の予定）（10/1） ・　学校訪問調査（教職員からの聞き取り、授業等の観察 他）（10/29）	評価チーム
12月	・　評価チーム会議（評価報告案作成） ※　電子メールによる会議 ・　学校及び教育委員会から評価報告案作成に向けた意見聴取	評価チーム
1月	・　学校及び教育委員会から評価報告案に関する意見聴取	評価委員会
2月	・　拡大評価委員会【評価委員会・評価チーム会議】（評価報告案他）（2/17）	評価委員会・評価チーム

4　評価者（評価チーム）

チーフ(評価委員)	曽余田浩史（広島大学 大学院 教育学研究科 准教授）
評価専門委員	平岡　満恵（元 小学校長）
評価専門委員	財津　伸子（比治山大学非常勤講師　　元 中学校長）

Ⅳ　評価報告

1　評価・分析結果の概要

(1)　総合的な状況

高陽中学校は平成22、23年度に大きく「荒れ」た。学校として、その「荒れ」の原因・要因を分析・把握し、平成24年度から指導方針を変更した。力で押さえる指導からまず生徒を受け入れる（生徒の話を聴く）姿勢を徹底した指導によって生徒との信頼関係を回復し、25年度、26年度と学校が落ち着いてきた。そこで、さらに新しい取り組みによって生徒を育てたいと模索している段階である。

いわゆる「荒れ」を克服し次の段階の学校づくりを志向するという段階であるが、教員は自分たちの取り組みによって「荒れ」を克服したという手ごたえを感じており、再び「荒れ」るのではないかという不安よりも、建設的な姿勢で授業づくり等に取り組もうとしている。

生徒は、通常の学校生活を送っている。見学した範囲では、教員や大人への不信感は感じられない。また、学習活動等の取り組みはほぼ真面目な態度である。ただし、思考力や主体性の面では、見学した範囲では、伸びる余地があるように感じられた。

多くの教員は「これまでがひどかった」というマイナスの発想で現在の学校をとらえており、高陽中学校の「良さ」や財産について、地域の支え･協力や部活動等をあげるが、今後の学校ビジョンにつながることを聞くことができなかった。今後の学校のビジョンとしては、「荒れ」ていた期間が限定していたためか、多くの教員が以前の落ち着いていたときの本校の姿をイメージしている（例えば本校の良さとして「みそあじ」をあげる等）ようである。

これまでは生徒同士の非建設的な関係を見直し、教員と生徒の人間関係づくりを進めてきたが、生徒相互で協力しようという意識の高まりや協力して遂行したという達成感など、生徒相互のかかわりを新たに創り出す段階に来ている。授業づくりと生徒会活動・学校行事等を通して，高陽中学校の生徒たちの内面の「誇り」と「文化」を育てていくことを期待したい。

(2)　各領域について

【生徒の状況】

①　生徒はほぼ落ち着いている。服装等で目立って逸脱した生徒は見られない。
- 全校生徒がチャイムできちんと行動し、来校者にあいさつする者もいる。
- 授業では全員着席し、教員の指示に従って活動に取り組んでいた。

②　個々の生徒は自分自身にかかわることではやりがいを持っているようであるが、生徒会、学級や班などの集団としての目標や目的的活動の掲示や活動が見られなかった。また、生徒会活動や学校行事などで、生徒相互で協力しようという意識の高まりや協力して遂行したという達成感などが感じられなかった。
- 中学生で見られるクラスや友達間での「集団意識のような雰囲気」はあまり感じられなかった。
- １・２年の生徒には、お互い注意する雰囲気がある。３年生は横の繋がりがなかなかできにくい。が、全員受験を考えており、頑張ろうとする様子が見られる。
- 生徒会執行部は、まだ指示を待つ傾向があるが、生徒自身の言葉で発信できつつある。

・　生徒会執行部の生徒は、自分の学校生活に達成感を感じていた。本校の自慢は「みそあじ」であり、先生方がよく話を聞いてくださることであると感じている。また、生徒会の課題は、各委員が学級へ持ち帰る議事等について学級での話し合いがほとんどできていない（意見が出ない）ことである。今後の本校の向上については、生徒が相互に注意し合えるようになることと考えていた。
・　委員会や生徒会執行部の生徒と、他の生徒との生徒会活動への意識・意欲の差は大きい。生徒同士をどう繋いでいくかが課題である。
・　生徒会担当の教員は、生徒会活動を生徒全員の活動として育てていくこと、執行部の活動を継承する面を育てることに力を注いでいる。
・　教員の意見に、「体育祭などでの生徒の活動について、先生方の指導の下、生徒の主体的な活動を引き出すのではなく、すべて生徒に任せればいいと感じるようなことを言っておられる先生がいた」との感想もあった。

③　掃除は生徒全員が担当場所に移動し取り組んでいるようであった。ただし、進んで掃除に取り組んだり反省会などで掃除の成果を確認したりするような積極的な態度は見られなかった。掃除時間が、エネルギーの発散時間のように数名の生徒がはじけている様子が見られた。

④　生徒の声を聴き生徒との信頼関係を作って生徒指導に取り組み、生徒が落ち着いてきたが、現在の状況について、生徒の中には、「教師に叱られるからする」という態度が見られることがあり、当初の方針を忘れ、一部の教員による強い指導が行われているのではないかということを危惧する教員もいる。

【学校運営の状況】

①　学校の立て直しを現校長がリードし、ともに立て直しに取り組んできたと、教員も保護者も感じている。

②　「平成 22、23 年度の「荒れ」に対して、教職員で原因・要因を分析・把握し、平成 24 年度から指導の方針を変更し、25 年度、26 年度と学校が落ち着いてきた。「荒れ」の原因は教員が生徒を押さえつけるような指導を行っていたため生徒との信頼関係が崩れていたことであると考え、指導はするがその前にまず生徒を受け入れる（生徒の話を聴く）姿勢を徹底したことで、状況が改善されてきた。」等の学校状況について、校長をはじめ全教員が共通した認識を持っている。

③　平成 24 年度以降、どの教員の指導も伝わるようにしたいと、学校組織体制の重要性を念頭において生徒に組織的な対応を行なってきている。
・　自分たちの取り組みによって学校の状況が改善したという手ごたえと教職員集団のチーム力を感じている教員の割り合いが多い。
・　各主任が方針を持って担当学年・部をまとめている。

【授業】

①　授業は徘徊や妨害、放棄などなく、生徒が学習活動を行っていた。
・　朝読書で静かな時間を持つことで、１時間目がスムーズにスタートできている。

②　生徒は、おおよそどの生徒も漢字練習やワークブック等をびっしりと書き（1 年）、地道な反復学習や作業をする基礎的な力が身についていると感じられた。これが小学校で指導されたものを中学校が引き継いでいるのであれば、素晴らしい。

③　教務主任は、本校の学力は通過率３０％以下の生徒が多く、学力向上のためにはこの層を減らすことであるという課題意識を持っており、その手立てとしては、教員の授業改善と学習支援のための巡回等が有効ではないかと考えている。

④　教務主任・研究主任・生徒指導主事を先頭に、これまで生徒指導に追われてできなかった授業づくりに取り組んで生徒を育てることを目指している。協同的な学習をめざしており、実践を積んだ指導力のある教諭が中心となっている。ただし、全体的には教員の授業力、認識のばらつきが大きく、学校全体で強力に推進するという段階には至っていない。校長は、そのことを認識し、教員の同意を充分に得ながら進めて行きたいと考えている。

・　見学した範囲（1年英語、国語、自習、2年英語、国語、音楽、3年国語等）では、学習活動が単純で単発的なものであったり、生徒にとって本時の目標が不明確であったりする授業が多く、板書もメモ程度のものが多かった。また、生徒の活動について、教員が内容的な高まり（深まり）を明瞭に要求しないまま生徒の活動に任せているような印象であった。

・　見学した範囲では、導入―展開―終末という展開や主発問、集団思考場面が明瞭でなく、教師の説明等も生徒へのアピールが少なかった。

⑤　小学校との授業づくりにおける連携、学年の中での共通理解の醸成などの取り組みが少しずつ行われている。

【その他の教育活動】

①　校訓「明浄直」が各教室に掲示してあったが、どのような場で、どのように指導しているのか不明であった。「校長先生が一番大切にしていることは？」「みんなに一番伝えたいことは？」という質問に、生徒会執行部の生徒も明らかではないようであった。

②　生活ノートの５行日記で担任との信頼関係を作っている。

③　各学級に鉢植えの植物があり、どの学級のものも元気であった。

④　掲示物は、多く貼られているものや集中的に貼られている場所などがある。教室の掲示は、学年で相談しているようである。ただ、全体的には少ない印象だった。学年初めの名票が黄ばんだまま貼ってあったのは疑問であった。

・　計画的な掲示物づくり（生徒の活動でもよい）、生徒作品や活動の経過が反映された掲示等、工夫の余地がある。例えば、学級の名票は各学級の生徒が出会った時のものであり、以後の学級の歩みによって個人、生徒相互の関係も変化し、共通の歴史もできてきているのでそれに合った掲示が加わると、最初の名票が生きてくる。

⑤　学校評価について

・　「学校経営計画」を校長が提案するということであるが、「授業の工夫改善へより重点をおいた取組をすすめる」ためには、領域「確かな学力の定着」で、研究主任と事前に細かな打ち合わせがなされたらよいと思う。中間評価を行い、成果がどうであるかを捉え、見直すことも必要ではないだろうか。

・　高陽中学校は良くなったという教員からの声が多かった。嬉しい声であるが一部、「教師の足並みが揃わず、どう組織を作っていくかが問題だ。」「保護者から、先生は話を聴いてくれないと家で子どもが言う」「発達・情緒に課題のある生徒への対応に課題がある」「教師の授業力に差がある」等の声があった。学校評価の活用を期待したい。評価するのは自己評価も大切であるが、他者からの評価を生かす工夫が重要である。

【環境・施設】

① 学校施設・設備が他の中学校に比して特異な点が多く、この施設・設備で生徒が安全に学校生活を送っているのは教職員の多くの指導や配慮等があると推察される。

・ 校舎等の配置、わたり廊下などが独特のつくりで、校舎内も木製の扉など大変古いものが残り、使われている。

・ 美術室の扉はスチールであるが傷んだものを修理している。このような扉や木製の扉が多くある。

・ 校舎が斜面に階段状に並んでいるため、わたり廊下は急で幅の狭い階段が大部分である。

・ 美術室前の廊下の端の敷居が高く、跨がないといけない。上の校舎から体育館の方への広く大きなわたり廊下にも校舎内廊下との境に幅 10 センチ高さ 15 センチくらいの敷居があり、跨がないといけない（用途不明）。

・ 一番下の校舎のわたり廊下の正面にはアクリルの風防壁が設置されているが、応急処置的で古く汚れている。掃除もできないようである。

② グランドと校舎を行き来するには一般道（車が通行）を横切らねばならない。生徒が安全に学校生活を送るために教職員が常に気を付けていなければならない点が非常に多い。現在は特にグランドへの不審者の侵入に対応することを教育委員会に要望している。

③ 保護者の希望に「校舎をきれいにしてほしい」ということがあった。保護者は学校環境整備のために、敷地内の草刈りや下足箱の修理をしているが、校舎自体が汚く生徒のためにきれいにしてほしいと願っている。

・ 校舎内は「荒れ」た痕は目立たず、落ち着いた感じになっている。校舎の周りや石垣は自然の草木でおおわれており除草・整備が難しそうである。

【家庭・地域と学校の関係】

① 地域の支え・協力という大きな財産がすでにあり、大切にしたいところである。学校の変化を見せることで、より一層、地域の期待感が生まれると考える。

・ 地域の意見は今回聴取できなかったが、保護者・教員の聞き取りを通して、本校の状況を批判することなく様子を見守っていることが感じられた。

② 保護者は、「荒れ」た時期からの現教職員による取り組みを評価し、協力したいと思っている。

・ 「環境の整備をしてほしい、もっと綺麗にすると学校の雰囲気が変わる」と、保護者はペンキ塗り・トイレの戸の補修等、施設・設備の整備作業などを協力している。

・ 聞き取りをおこなった保護者の方は、中学校へ進学してくるのであるから、地域の小学校同士の交流が行事的にももっとあってほしいとの希望を持たれていた。

③ 生徒は、「中学校では小学校の時に比べて地域とのかかわりが少ない」ようであると思っている。

④ 地域とのかかわりについて、「荒れ」た時に地域に迷惑をかけたこと、ボランティア活動に出ていること、地域の支援が大きいこと以外は実態や計画が具体的には聞かれなかった。本校にとって地域は大きな支援母体であり、学校（生徒、教職員）と地域とのかかわりを積極的に計画していくことを目指して、地域を把握し直すことが大切ではなかろうか。

⑤　現在でも狩小川フェスタに中学生が参加するなどしているが、さらに、生徒たちが深川小時代に植樹を行っている木の宗山憩いの森の千本桜の掃除など、中学生を「お客さん」ではなく「主人公・リーダー」として地域にかかわらせたいという思い・企画を学校（校長）は持っている。

【小中連携の取組状況】

① 学区の小学校との連携・協力の重要性と必要性を教員たちが感じており、授業づくりの視点から歩調を合わせる、具体的な教育内容での連携を図ろうと取り組んでいる。
・小中連絡会等で、風通しが良くなった。繋がりが良い結果をもたらしている。

②　学校評価の面でも連携を持つことができればと思う。９年間の子どもの育ちという視点から、評価の入り口（小学校入学）と出口（中学校卒業）が繋がることができればと考える。

③　具体的に、小中間、小小間でどう交流し連携するのか、何を取り組むのかを明確にしたほうがよいのではなかろうか。

2　意見・提言

(1)　高陽中学校に対して

①　生徒の最終の目指すところ（生徒の内面の誇り）の明確化

高陽中学校は生徒相互のかかわりを新たに創り出す段階に来ており、生徒たちの内面を耕し、「文化」を育てていくことが望まれる。そのために、生徒の最終の目指すところ（生徒の内面の誇り）を明確にする必要がある。たとえば「みそあじ」という合い言葉は、生徒に浸透している。しかし、「みそあじ」（みだしなみ・そうじ・あいさつ・じかん）は、卒業していくときの、生徒の最終的な姿・到達目標・目指すところへ行くための手段であろう。これら「みそあじ」の登山ルートにより、山頂ではどのような姿・景色を目指すのかを明確にする必要がある。

②　生徒会活動や学校行事や学級などの集団での活動の充実

・　これまでは生徒同士の非建設的な関係を見直させ、教員と生徒の人間関係づくりを進めてきたので、生徒会活動や学校行事などで生徒相互のかかわりを新たに創り出す段階に来ている。これまで教職員の取り組みによって状況を変えることができたので、今後は、生徒会や学級など、集団での活動を積極的に取り入れて、生徒が他者と関わる力や達成感を味わわせること、感動体験等の学習を多く取り入れていくことが次への段階であるように思われる。

・　校長も生徒の活動をもっと活性化していくビジョンを持っているようなので、それを推進していくとよいのではなかろうか。その時に、各教員の役割は「荒れ」に取り組んだ時から新しいものに変わっていくことを意識して教員組織が取り組むことが必要である。

・　これまでの本校の取り組みの推進方法を踏まえると、教員と生徒とのかかわりについて、「まず生徒を受け入れる（生徒の話を聴く）こと」から、次にどのように指導・支援が必要なのか分析・検討を行い、方針を話し合い、それに徹底して取り組んでいくことがよいのではないだろうか。

③　授業研究の推進

・　授業研究に取り組みたいという教員が多く、今後の方針は時機を得ていると感じた。生徒は教員が想定しているより高い学習力をもっており、質的に高いものが示されれば、それを習得する力を持っていると思われる。授業の質的な向上を図ること、生徒の主体的な学習活動を育てることが今後の視点であると思われる。それには、教員が基本的な授業力を確実に身につけるとともに、授業の質を高めるための研修が必要であろう。

・　学びあいの授業を目指すために、取り入れている小集団による協同的な学習が、このスタイルで良いのかを検証する必要があるだろう。学ぶ権利を保障するために、分からないことを言えるようにしたい・生徒同士の信頼関係を作りたいという方向は守る。しかし、分からないことを言うというのは現時点でハードルは高くないだろうか。「分からない」という表現ではなく、「疑問に思ったこと」「不思議に思ったこと」「もう少し考えてみたいこと」等、前向きな学習活動につながるような伝え方にしてはどうであろうか。

・　授業づくりでは、経験の浅い教員への指導・支援体制を作るために、今まで以上に細かいステップが必要ではないだろうか。

④　**ドリル学習（繰り返し学習）の導入**

・　小集団による協同的な学習と並行して、ドリル学習（繰り返し学習）等も位置付けていくことが、通過率３０％以下の生徒を減らし、学力向上に結び付くと考えられる。

・　学力テストの結果報告を学校便りで行っているが、保護者説明会を行い、実態をきちんと説明することで、家庭学習への協力を得ることや、ドリル学習の導入等が可能になるのではないだろうか。

⑤　**地域との積極的な連携の推進**

木の宗山憩いの森の千本桜の掃除をはじめ、中学生を「お客さん」ではなく「主人公・リーダー」として地域にかかわらせたいという思い・企画を校長は持っている。この思い・企画を地域・小学校と連携しながら積極的に推進してもらいたい。そのためには、学校と地域をつなぐコーディネーターの存在が望まれる。

⑵　教育委員会への要望

①　人事上の配慮

学校は大きな「荒れ」から脱しつつあるものの、まだ予断を許さない状況にあり、各教職員の負担はかなり大きい状況にある。ゆえに、本校には少なくとも一定の指導力を備えた教員を配属する、臨採もできうるかぎり少なくする等の人事上の配慮が必要である。

②　安全と清潔・快適な環境の整備

現在、高陽中学校が要望している不審者対応策等については早急に対応が必要である。また、業者による暴風壁等の清掃など、本校の施設状況に応じた整備と支援が必要である。学校の取り組みでは難しい環境の課題が多くあり、教職員の努力や工夫のみに任せることなく、教育委員会として、安全と清潔・快適な環境の整備が望まれる。

③　地域との積極的・計画的な連携の推進

豊かな人間性の育成や学力の向上に向けて、これまでの学校と地域との協働態勢をさらに活かしていくために、「まちぐるみの教育」活動が充実、強化されるように、教育委員会としての支援が望まれる。